

六

日本國中華民國臨時政府簽下圖行  
國務院外交委員會編纂

一、爲替ノ種類

爲替ノ種類ハ差回小爲替及差回爲替ノ二種トスルコト

二、金銀ノ表示

爲替ノ金銀ハ差回日本國相場及差回以テ之ヲ表示スルコト

三、金銀ノ制限

小爲券一口ノ最高額ハ二十圓、電信爲券一口ノ最高額ハ五百圓トスルコト

小爲券ノ金額ニハ兩位未満、電信爲券ノ金額ニハ四位未満ノ繰上ヲ附セザルコト

四、料金

小爲券一口ノ爲券料ハ本邦内國小爲券ノ夫ト、朝鮮及滿洲州ニ在ル郵便局ト中華民國郵便局トノ間ニ取組ム電信爲券ノ爲券料ハ本邦内國電信爲券ノ夫ト、日本内國、臺灣、韓太及南洋群島ニ在ル郵便局ト中華民國郵便局トノ間ニ取組ム電信爲券ノ爲券料ハ本邦内國電信爲券ニ於ケル所定電信爲券ノ夫ト同一ノ料金トスルコト

特殊ノ取扱ニ對スル料金ハ各自國ノ内國業務ニ於ケル類似ノ取扱ニ對スル料金ヲ超過セザル範圍内ニ於テ其ノ請求ヲ受領スル局ノ郵政長之ヲ定ムルコト

五、特殊取扱ノ種類

特殊取扱ノ種類ハ左ノ如トスルコト

イ、留置（電債為替ニ限ル）

ロ、補償済通知

ハ、特便ニ依ル配座（電債為替ニ限ル）

ニ、至急電報（電債為替ニ限ル）

ホ、補償費否取置

ヘ、補償停止（電債為替ニ限ル）

ト、勘定差

チ、電報ノ發送

六、為替ノ権利ノ譲渡

郵便為替金ニ對スル権利ハ補償済通知ニ於テ譲渡引ニ依ル發行ヘノ讓渡ヲ認ムルトキ及小為替ニシテ受取人ヲ指定セサルモノノ外之ガ譲渡ヲ禁ズルコト

七 贈與ノ有効期間

爲贈與者ノ有効期間ハ遺言發行ノ日ヨリ六十日トシ交通不便ノ地方ニ付  
テハ郵政機關ノ距離ヲ以テ之ヲ延長シ得ルコト

八 再度遺言發給、補戻

遺言ノ有効期間ヲ経過シタルトキ又ハ遺言ヲ亡失、破損若ハ汚穢シタル  
トキハ作出人又ハ受取人ニ於テ再度遺言ノ交付ヲ又ハ爲替金ノ補戻ヲ請  
求シ得ルコト但シ遺言亡失ノ場合ニ於ケル期間内再度遺言發行及補戻請  
求ノモノニ對シテハ相當保證人ヲ立テシムルコト

九、責任ノ範圍

郵便爲替ト爲ス爲拂込ミタル金額ハ振出郵政總ノ法制ニ定ムル時効期  
間内ニ限り正當ニ爲替金ノ拂渡ヲ了スル迄振出郵政總ハ差出人ニ對シ  
之ヲ保證スルコト

責任ハ拂渡郵政總ガ正規ノ手續ヲ一々拂渡ヲ爲シタルコトヲ證明シ得  
ザル場合チ除クノ外振出郵政總ニ於テ之ヲ負擔スルコト

電信爲替ニ關スル損害ニシテ電信業務ノ過失ニ起因スルモノハ過失ノ  
生ジタル國ノ郵政總之ヲ負擔スルコト過失ノ生ジタル地ヲ決定スルコ  
ト能ハザルトキハ振出郵政總及拂渡郵政總ハ平等ニ其ノ損害ヲ負擔  
スルコト

虛偽ノ爲替證書ニ對シ拂渡ヲ爲シタル場合又ハ重複ノ拂渡ヲ爲シタル

場合ニ於テ其ノ責任ヲ決定シ能ハザルトキ亦同様ナルコト

十、料金ノ額當

各國郵政廳ハ自國ニ於テ徵收シタル爲替料ノ一部ヲ相手國郵政廳ノ收  
得分トシテ之ニ割當ツルコト  
前節ノ割當金額ハ小爲替ニ在リテハ拂渡濟爲替證書ノ金額ノ千分ノ一  
ト同額トシ電信爲替ニ在リテハ拂渡濟爲替證書ノ金額ノ千分ノ三ト同  
額トスルコト

十一、計算及清算

各國郵政廳ハ爲替ノ交換ニ依リ生ジタル信高ヲ相互ニ支拂フコト  
日本國郵政廳ハ中華民國臨時政府管下及滿洲國間ニ交換セラレタル爲  
替ノ拂渡金ニ付日華爲替又ハ日滿爲替ノ例ニ依リ決済ヲ媒介スルコト

十三 取扱局

兩國共内國業務ニ於テ類似ノ業務ノ取扱ヲ爲ス局所ニ於テ取扱ハシムルコト但シ事情ニ依リテハ尙向特定局ヲシテ取扱ハシノ漸次之ヲ擴張スルコト

十三 用紙及用紙

證書用紙及兩國業務間ニ使用スル式紙ハ漢文ノ對譯ヲ附シ又ハ海附セザル日本文書ヲ以テ記載スルコト  
電信爲替ノ報知ハ和文電報ニ依ルコト



十國實施期日

小爲替及電信爲替ハ同時又ハ各別ニ施行期日ヲ定ムルコト

北支郵政儲蓄接收手帳簿

(一三・一・八)

滿洲國郵政接收當時の中華民國被郵便貯金

處理狀況大要 (昭和十一年二月通信協會雜誌 大和新一郎氏寄稿中ヨリ抄)

昭和七年(大同元年)七月下旬郵政接收せるも郵便貯金には手を附けず。

昭和八年(大同二年)四月南京政府は魯東三省管内に於て預入せる郵便貯

金は河北省以南の郵局(即ち中華民國郵局)に

於て確證の手續爲し且つ排戻の請求に應ずる

旨布告せり。

昭和八年(大同二年)五月郵便貯金事務を開始せるも中華民國被の分に對

しては支拂準備を爲したるも前記の布告により

實際の上は何等の手を施さずして終れり。

備考 滿洲國にありし中華郵政時代の郵便貯金は昭和七年三月頃即ち郵政

接收前には約六十萬圓と云はれてゐたが滿洲國成立一郵政接收の聲

に動かされて接收直前は三十七萬圓程度に減じたと云はれてゐる。

(北支關係)

北支獨立ノ場合ニ於ケル

郵便爲替業務連絡ニ關スル考察

- 一、郵便爲替業務連絡ノ必要
- 二、郵便爲替業務連絡ノ形態
- 三、郵便爲替業務連絡ノ内容
  - (イ) 業務連絡ノ方針
  - (ロ) 爲替交換ノ方式
- 四、各郵政廳ニ於ケル業務上ノ施設
- 五、第三國トノ關係
- 六、爲替交換高見込

昭和十一年十月

北支獨立ノ場合ニ於ケル

郵便爲營業務連絡ニ關スル考察

一、郵便爲營業務連絡ノ必要

事變發生以來我國ノ軍事工作ハ著々其ノ效果ヲ收メツツアル處、南京政府ノ頭迷ト國際情勢ノ動向ニ鑑レバ時局ハ之ヲ以テ急速ニ解決ヲ告グルヤ又ハ支那側ノ意圖スル長期戦ニ移行スルヤ若ハ第三國ノ介入ニ因リ更ニ意外ノ方面ニ發展スルヤハ遽ニ豫斷ヲ許サザルモ目下ノ情勢ヨリスレバ少クトモ北支地方ニ關スル限りハ日ナラズシテ時局ノ安定ヲ見、不逞分子ノ一掃ト排日政策ノ拂拭トニ依リ南京政府ヨリ絶縁セル明朗北支ノ獨立ヲ見ルハ豫想スルニ難カラズ

斯ル新情勢ノ展開ニ伴ヒ北支大衆ノ福祉増進ト日滿兩國トノ和親提携ヲ

具現スベキ經濟建設工作ハ朝野各方面ニ於テ計畫研究セラレツツアルモ之ガ實施ニ依リ北支ヲ對象トスル我國ノ人的及經濟的進出ノ活潑トナルニ伴ヒ彼我間ニ於ケル郵便爲營業務交換ノ需要ハ必然的ニ増嵩スルモノト豫想セララル、然ルニ現在之ガ取扱ニ任ズル日支郵便爲營業務ハ帝國ト支那共和國トノ間ニ締結セル約定ニ依ルヲ以テ北支獨立後之ヲ其ノ儘適用スルハ法理上妥當ナラザルノミナラズ假ニ準用セララルトスルモ往時ノ制定ニ係ル右約定ノ規定ヲ以テシテハ新ナル北支ノ局面ニ於テ克ク其ノ職責ヲ全ウシ得ザルハ明ナル處ニシテ右ニ代ルベキ新郵便爲營業務連絡ノ途ヲ講ズルハ當然必要トスルトコロナリ

三、郵便爲營業務連絡ノ形態

彼我ニ於ケル郵便業務ヲ連絡セシムル形態ハ今後ニ於ケル北支政局ノ歸

結スル態様如何ニ依リ一様ナルヲ得ズ即チ將來展開セララルル北支ノ政治情勢ガ事變前ニ於ケル冀察政府ノ如キ國家形態ニ依ラザル特殊政權ノ樹立ヲ見ルニ止マル場合ハ別トスルモ總ニ滿洲國成立ノ場合ニ於ケル如ク(イ)北支ヲ一單位トスル獨立國家ノ成立トナルカ又ハ(ロ)小獨立國家ノ併立トナルカニ依リ陸業務連絡ノ方策モ亦異ニセザルベカラズ而モ既ニ僞存スル冀東自治政府及這般前後シテ獨立ヲ宣言シタル察南、<sup>晉</sup>北兩自治政府ノ介在ハ之ガ複雑性ニ更ニ拍車ヲ掛クルモノトス

抑々郵便事業ハ其ノ性質上、各分立セル小區域ヲ以テシテハ業務ノ圓滑ナル運行ヲ期スルコト能ハズ必ズ他ト有機的ナル連繫ヲ保持スルノ要アルヲ以テ如上(イ)(ロ)孰レノ場合ニ於テモ事、郵政ニ關スル限りハ好ムト好マザルトニ不拘北支ヲ擧ゲテ一郵便區域ト爲サザルヲ得ザルニ至ルハ明ナル處ナリ從テ本邦ト郵便爲替業務ノ連絡ヲ爲スニ當リテハ其ノ形式ハ政局ノ歸結如何ニ依リ兩様ノ場合ヲ豫想セラルルモ業務ノ内容ハ之ヲ同一ト爲スモ支障無キモノト認ム

### 三、郵便爲替業務連絡ノ内容

業務連絡ノ實質的内容ハ要スルニ北支トノ郵便爲替關係ヲ日滿間ノ制度ニ統合乃至接近セシメ日滿支郵便爲替「ブロック」結成ヲ目標トスルニ在リ

尤モ之ガ實現ハ北支獨立ニ對スル帝國政府ノ承認及北支ニ於ケル完全ナル郵政ノ接收ガ其ノ根本的前提ヲ爲スモノニシテ郵政接收ノ時期及援助方法等ハ當省ニモ重大ナル關係アルモノナルモ夫等ハ北支經營上ノ所謂國策ニ關ハルモノナレバ早晚適當ニ解決セララルトノ前提ノ下ニ以下爲

替交換ノ方策ヲ考究スベシ

(イ) 業務連絡ノ方針

北支獨立當初ニ於ケル對日郵便爲替關係ハ恐ク現行ノ日支間郵便爲替交換約定ト共ニ、同郵便物交換約定、同價格表記書狀及箱物交換約定及電信ニ關スル諸協約等ヲ準用スルノ已ムナキニ至ルベキモ、北支ノ獨立ヲ尊重スル建前ヨリスレバ此ノ種ノ準用ハ可及的速カニ廢止シ之ニ代ルベキ諸約定ヲ締結スルノ要アリ然レ共之等ノ諸約定ハ何レモ相互ニ關聯ヲ有スルヲ以テ其ノ締結ハ同一時ナルヲ要シ勢ヒ大規模トナル爲其ノ實現ニハ相當ノ日子ヲ要シ早急ノ需要ニハ應ジ難キコトト思料セララル故ニ之ガ過渡的便法トシテ交換方式ノ比較的輕易ナル小爲替業務ニ付暫行的取極ヲ爲シ以テ彼我公衆ノ急需ニ應ズルコトトシ、全面的業務ノ連

絡ハ爾後ノ整備擴充ニ俟ツヲ得策トスベシ

滿洲國對北支トノ關係ニ於テモ同様ニシテ差向ハ現行滿華爲替ヲ準用シ後本邦ト併行シテ準備ヲ進ムルヲ可トスベシ

(ロ) 爲替交換ノ方式

原則トシテ現行日滿爲替ト同様ナルヲ可トス

即チ爲替種別ハ通常爲替、電信爲替及小爲替ノ三種(更ニ旅行小爲替ヲ加フルモ可)トシ、爲替ハ之ヲ案内式トシ、電信爲替ノ報知ハ和文電報ニ依リ、爲替金額ハ邦貨ヲ以テ表示シ其ノ他金額ノ制限、特殊ノ取扱、料金、決済方法等モ事情ノ許ス限り日滿爲替ノ夫ニ準ズルモノトス

四 各郵政廳ニ於ケル業務上ノ施設

本邦側ニ於テハ業務運營ノ規準トシテ相當法令ノ制定公布ヲ要スルモ業

務態様ハ概ネ内國制度ニ準ズルヲ以テ處理物數ノ膨脹<sup>脹</sup>ニ備フル以外特別ナル新規施設ノ要ハ無カルベシ

北支側ニ於テハ既ニ設置アル二千七百餘ノ郵便局ヲ南京政府ヨリ接收セバ差向取扱機關ノ不自由ハ無カルベク（因ニ滿洲國ニ於ケル現爲替取扱局數ハ四百十餘ニ過ギズ）電信爲替ニ於ケル和文電報ノ回線モ既設ノモノアリ又爲替ノ航空送達ニ當ルベキ航空路モ先年開拓済ナルヲ以テ、本業務ノ實施ニ付テハ北支側ニ於テモ比較的好條件ニ惠マルモノト見ラル

尤モ用語ノ問題、使用式紙ノ點等北支側ハ我方ニ比シ兎角不便ナル事情ニ在リ且ツ貨幣制度ノ歸着如何ニ依リテハ通貨換算率ノ問題ヲ豫想セラルルモ是等ノ點ニ關シテハ施行樂地域又ハ取扱局ノ限定若ハ中繼局ノ設置等ニ依リ當面ノ對策ヲ講ジ後漸ヲ逐フテ整備擴充ヲ圖ルコトトセバ（因ニ日滿小爲替創設當初ニ於ケル滿洲國側ノ取扱局數ハ僅ニ四十局ナリキ）些シタル障礙トハナラザルベシ

### 五 第三國トノ關係

北支及第三國間ノ政治的關係如何ハ往年滿洲國成立ノ際、列國ノ表明セル態度ニ想到スレバ自ラ明ナルヲ以テ之ガ推測ハ姑ク措クモ若シ北支ト日滿以外ノ諸國間トノ關係ニ於テ郵便爲替ノ交換ヲ必要トスル場合ハ事情ノ許ス限り本邦ニ於テ之ガ媒介ニ任ジ以テ爲替利用者ノ利便ヲ増進スルト共ニ北支ノ通商及經濟發展ヲ援クルコトトシ又同様ノ趣旨ニ依リ本邦ト爲替ノ交換ヲ爲ス諸外國ヨリ北支ニ宛ツル爲替ノ媒介ヲモ併セ行フベキモノトス

六爲替交換見込高

今後ニ於ケル北支政局安定ノ態様及邦人進出ノ具体的見透等分明セザル  
 今日、爲替業務連絡後ニ於ケル交換高等ヲ推算スルハ事實上不可能ナル  
 モ之ヲ日滿爲替ニ於ケル先例ニ徴スレバ其ノ發展性ハ蓋シ期シテ待ツベ  
 キモノアリト謂フヲ得ベシ即チ日滿間ニ於ケル業績ヲ顧ルニ日滿小爲替  
 約定施行中タル昭和十年中合計ニ於テ

業務種別	受拂口數	受拂金額	一口當金額
日滿小爲替約定ニ依ルモノ	三二一、七五三	四六一、四七八	一四三
日支爲替約定準用ニ依ルモノ	八九八六九	三、九五〇二五	三六六六
計	四一一、六二二	七九〇、九八〇八	一九二二

ニシテ同年中ニ於ケル本邦國際爲替受拂高中口數七割二分、金額五割

四分ヲ占メタリ其ノ後現行日滿郵便條約實施セララルルニ及ビ更ニ一段ノ  
 飛躍ヲ遂ゲ昭和十一年度ニ於テハ

爲替種別	受拂口數	受拂金額	一口當金額
通常爲替	一六〇、一〇六	九九二、三七五九	六一、九八
電信爲替	一〇四、一三五	八三〇、一二五七	七九七二
小爲替	五六六、六〇八	六八〇、七三九一	一二、〇一
計	八三〇、八四九二五〇	三、三、四〇七	三〇、一三

ニシテ之ヲ前掲ノ計數ニ比スレバ口數ニ於テ十割強、金額ニ於テ二十一  
 割強ノ夫々激増トナリ本邦國際爲替受拂高中、口數、金額其實ニ八割ニ  
 當ル高率ヲ占メ其ノ後逐日膨脹發展ノ一途ヲ辿レリ而モ小爲替取組數ノ  
 龐大ナルハ表中見ル如クニシテ、本邦及大陸間ニ於テ斯ル輕便ナル送金



機關ノ需要如何ニ熾烈ナルカヲ如實ニ立證シ居レリ  
斯ル前例ニ徴スレバ北支トノ關係ニ於ケル郵便爲替ノ業績ハ洋々タル前  
途ヲ約束セラルルモノト謂フベク而モ人口及取扱機關共ニ滿洲國ノ數倍  
ヲ擁シ民衆、經濟力亦優勢ナル北支ニ於テハ郵便爲替業務ニ在リテモ日  
滿爲替ヲ凌駕シ相共ニ本邦國際爲替ノ双<sup>璧</sup>トナル日モ遠キ將來ニ非ザル  
コトト信ズ